【研究論文】

小津安二郎『秋刀魚の味』論

―「旬」を思うとき―

北澤　あかり

一　はじめに

本論文は、小津安二郎監督の映画『秋刀魚の味』（一九六二）（一）を取り上げ、作品名の意味を分析することで浮かび上がる戦争表象について考察するものである。

作品名が「秋刀魚の味」であるにも関わらず、映画には秋刀魚が登場しない。貴田庄は作品名について、小津の言葉を手掛かりにして次のように述べている（二）。

かつて小津は、『秋刀魚の味』というタイトルについてたずねられたとき、「サンマはやすくてうまいからね」と答えている。小津は、日本人にとっての秋刀魚の持つ雰囲気、つまり、安くてうまい、大根おろしと一緒に食べる秋刀魚の塩焼、その味がこの作品なんだといいたいのだろうか。〈略〉『秋刀魚の味』の演出もおそらく同様であると考えられるが、そのタイトルもまた、直接、物語に関係あるのではなく、日本人が秋刀魚を食べて感じるような味をそこはかとなく表現しようとしたものであると考えられる。

また、近年では増當竜也が、「タイトルの意味も、秋刀魚をはらわたまで食したときのほろ苦さを人生にたとえたものだという」と解説している（三）。

作品名は、秋刀魚のほろ苦い味を人生にたとえたものとして解釈されてきたようだ。果たしてそうか。本稿では、従来とは異なる視点から作品名を捉え返し、『秋刀魚の味』が描き出す戦争の記憶を浮き彫りにしていく。

なお、本稿における「小津映画」とは、小津安二郎が監督した作品をさす。

二　秋刀魚と鱧

小津安二郎は、『秋刀魚の味』は「ありふれた平凡

な人を主人公にした作品」（四）であるとし、作品名については次のように語っている。

別に意味はない。去年の夏松竹の人が、つぎの作品は？　ときくから「秋刀魚の味」と答えて置いただけだ。

（無記名「小津監督　出演者と打ち合わせ」『報知新聞』一九六二年八月十一日）

題名は宝塚映画で仕事中、松竹から次回作を催促された際、なんとなくつけたもので、うまくもまずくもない安い〝サンマ〟にちなんだ。ボク自身サンマは好物だが秋にはたして出来上がるかどうか。なんなら〝かずのこの味〟とでも題名を変えて、冬に公開をのばしてもらおうかな

（無記名「緊張する新入生吉田」『東京タイムズ』一九六二年八月十一日）

「さんまの味といっても佐藤春夫氏の詩にあるようなさんま、にがいかしょっぱいかといったニュアンスではなく別に他意ないんです。まア庶民的ということです。作品が延びて秋にできなければ〝冷凍さんまの味〟正月にでもなれば〝数の子の味〟としてもかまわないわけですよ」

（無記名「小津調豊かに父娘の情感秋刀魚の味」『新関西』一九六二年九月三日）

小津が言及している「佐藤春夫氏の詩」とは、佐藤春夫が一九二一年に発表した「秋刀魚の歌」（五）である。これは、秋刀魚の苦さと塩っぱさを、恋に破れた男の心情に重ねた詩である。

以上のことから、作品名「秋刀魚の味」は、秋刀魚の味とほろ苦い感情とを重ね合わせたものというよりは、秋刀魚の持つ庶民性を作品内容に準えたものであると言える。

ここで、小津が、秋でなければ「冷凍さんま」、正月なら「数の子」と、食材の旬を意識している点に注目する。『秋刀魚の味』には、秋刀魚は登場しないが、魚類の食材としては鱧が登場する。主人公・平山周平（以下、平山）たちの同窓会の席で、旧師・佐久間清太郎（以下、佐久間）は美味しそうに鱧を口に運ぶ。以下、該当部分の脚本である（六）。

佐久間「あァうまい　これは何ンですか」

河合「ハモでしょう」
佐久間「ハム？」
河合「いゝえ、ハモ……」
佐久間「アゝ、ハモ――（食べて）なるほど、結構なもんですなア（吸って）ウーム、鱧か……。サカナ篇にユタカか……ハモか……」
〈略〉
堀江「おう帰ったかい」
菅井「アゝ帰ったよ――ヒョータン、大分ご機嫌だったじゃないか」
渡辺「あいつ鱧食ったことないのかな、字だけ知ってやがって」
（論者注…「ヒョータン」は佐久間を指す）

鱧は、ウナギ目ハモ科の海産魚であり、夏に旬を迎える食材である。秋刀魚は、ダツ目サンマ科の海産魚であり、秋の味覚として親しまれる。「鱧」は夏の季語であり、「秋刀魚」は秋の季語である。『秋刀魚の味』の物語世界の季節は秋であるため、登場人物たちが鱧を食すとき、鱧の旬は既に過ぎている（七）。

ここで、秋刀魚と鱧の旬が異なる点に留意した上で、登場人物の年齢設定に注目したい。『秋刀魚の味』には、平山の娘・路子と、佐久間の娘・伴子という、二人の未婚女性が登場する。脚本（八）では、路子は二十四歳、伴子は四十八歳として年齢が設定されている。一九六二年（九）における初婚の女性の平均婚姻年齢は二十四・五歳である（一〇）。同年の年齢階級別婚姻件数割合を見ても、女性は二〇～二九歳での婚姻が全体の八割を超えている（十一）。

「旬」は、「季節の食物が出盛りの時」のことであり、これは転じて「物事を行うのに最も盛んな時期」の意も持つ（十二）。先述の統計結果から、二十四歳の路子は結婚するのに「最も盛んな時期」、すなわち「旬」を迎えている。

「旬」の食材は、「脂が乗る」と形容されることがある。「脂が乗る」は、「身体に脂肪が富んで、栄養十分であるさま」、「魚や鳥などの脂肪が増して味のよいさま」を意味する慣用句であり、これは転じて「色気のあるさま」をさすときにも用いられる（十三）。作品内で、平山の友人・河合は、路子の色気について言及し結婚を勧める。ここからも、路子は「旬」を迎えていると言える。

佐久間は鱧を「サカナ篇にユタカ」と書くことは知っていたが、その味は知らなかった。これは、佐久間

が伴子を、「嫁の口もないじゃなかったが」「つい便利に使うてしもうて」嫁に「やりそびれて」しまったことの暗喩である。つまり、現状よりも「豊か」な状況を獲得し得る「伴子の結婚」という選択肢を知りながらも実際にはそうしなかった佐久間の姿が、鱧という漢字を知りながらも実際には食したことがなかった姿に重ねられているのだ（十四）。

以上のような語義や世相から、秋刀魚は路子、鱧は伴子の暗喩であると考察する。

『秋刀魚の味』の公開五年後の一九六七年、独身婦人連盟（以下、独婦連）が結成された。これは、「結婚するのに最も盛んな時期」、すなわち本稿で言う「旬」と戦時が重なり、戦後独身で生きていくことを余儀なくされた女性たちの集いである。

「独婦連」を立ち上げた大久保さわ子が、一九四五年の敗戦時に十五～二十九歳だった女性と、同じく敗戦時に二十～三十四歳だった男性の数を比較したところ、女性の方が男性よりも二百五十五万人多いという結果が出た。そこで生まれた独身婦人の数は五十万人を超すと言われている。

終戦当時、適齢期にあった女性と男性の数を比較すると、約二五五万人も女性が多かった。単純に言ってしまえば、戦争は、その二五五万人の女性たちから人生のパートナーとなるはずの男性を奪ったのだ。

それら戦争を原因とする「戦争独身」とも言うべき女性たちは、良妻賢母教育を受け、「女は結婚し、子どもを産むのが当たり前」とされた社会のなかで、ひとりで働いて生きてきた。彼女らは老親、とくに年老いた母親を抱えて働き続ける人も多かった。そんな女性たちを世間は「オールド・ミス」「売れ残り」「行かず後家」と揶揄した。

〈略〉職場以外でも、地域社会で、そして家族のなかでさえ、彼女らは「婚期をはずした独身女」ということで、「半端者」と見られ、いわれのない中傷をうけ、憐憫の目で見られた。

（古庄弘枝『どくふれん――元祖「シングル」を生きた女たち――』、二〇〇五、ジュリアン社）

伴子は、物語中で四十八歳であることから考えると、一九三〇年には十六歳、一九四五年には三十一歳であり、「旬」が戦時とちょうど重なっている。「旬」を過ぎても独身である伴子の存在を、登場人物たちは否

定的に捉えている。

渡辺　「先生、お嬢さんいられましたね」
佐久間　「はい、おります」
菅井　「アゝ、綺麗な可愛いお嬢さん……」
佐久間　「えゝ、おはづかしい……」
河合　「お嬢さんお孫さんおいくたりです？」
佐久間　「それがね、わたしは早うに家内を亡くしましてな、娘もまだ一人でおるんですわ」
河合　「そうですか、そりゃアお淋しいんですね……」
河合　「あの娘だってどっか変だぜ。なんとなくギスギスしてゝてさ、冷たくてさ、あれじゃヒョータンも寂しいよ」
平山　「ウーム、あゝはなりたくないな」

伴子は、父と二人で営む場末のラーメン屋で、酔い潰れた老父を見ながら、一人で涙を流す。多くの独身婦人の出現と彼女らへの蔑視という、戦後に生まれた社会問題の一つを、観客は伴子の涙にみとめることができる。

三　平山の「旬」と「軍艦マーチ」

登場人物のうち、特に路子と伴子に注目してきた。続いて、物語の主人公である平山の人物像について考察したい。

中華ソバ屋「燕来軒」及びバー「かおる」における坂本芳太郎との再会の場面で、平山周平がかつて駆逐艦「朝風」の艦長であったことが明かされる。

坂本　「艦長ッ！　艦長さんじゃありませんか！」と立上る。
平山　「（不審そうに）エート……あなた、どなたでしたかな」
坂本　「坂本ですよ！　坂本芳太郎――。「朝風」に乗っとりました……一等兵曹の……」
平山　「アゝ、坂本さん、そうでしたか……」
坂本　「（佐久間に）なア親父、こちらはおれが乗ってた駆逐の艦長さんだよ」
佐久間　「そうですか。それはそれは。――そう云えば平山さんは海兵にいかれたんでしたなア」

艦長の地位は高く、多くの海兵にとって憧れの対象だった。一九五八年公開の小津映画『彼岸花』には、平山、河合、堀江という三人の男が、元艦長の三上について次のように話す場面がある（十五）。

堀江　「エート、ありゃいつだっけな、十……七年か八年か、山口へ行った帰りにね、呉へ寄ったんだ」

平山　「へえェ、その時分、三上まだ呉にいたのかい」

堀江　「いたよ。そのあとが艦長だ。水交社でひと晩ご馳走になってね。ずいぶんあったなァいろんな酒が……」

河合　「その時分があいつの全盛だな」

『秋刀魚の味』の平山と『彼岸花』の三上は、どちらも俳優の笠智衆によって演じられている。海軍時代に艦長を務めた点、婚期の娘を持つ点など、両者の人物設定も類似している。『秋刀魚の味』の平山にとっても、海軍時代は彼の「全盛」、人生における勢いのある時期であり、本稿で言う「旬」であったと言えるだろう。

また、平山が艦長であったことや、佐久間の「平山さんは海兵にいかれたんでしたなア」という言葉から、平山は海軍兵学校の卒業生であると推察できる。

海軍兵学校とは、大日本帝国海軍の士官養成機関である。戦時体制に入る以前の倍率は約二〇倍前後で、一高（現在の東京大学教養学部の前身）か海兵（海軍兵学校）かと言われたほどの難関であった。艦長など士官を務めた者の多くが、海軍兵学校をはじめとする海軍専門機関の出身だった。例えば、佐藤和正『艦長たちの太平洋戦争』（十六）には、太平洋戦争時に艦長を経験した五十一人の証言が集められているが、そのうち駆逐艦の艦長経験者二十三人は、全員が海軍兵学校の卒業生である。

戦前の小津映画には、学生生活を描いたものが多くある。『学生ロマンス　若き日』（一九二九）、『大学は出たけれど』（一九二九）、『落第はしたけれど』（一九三〇）、『淑女と髭』（一九三一）、『東京の合唱』（一九三一）、『青春の夢いまいづこ』（一九三二）がそれである。また、現在鑑賞不可能な作品のうち、『若人の夢』（一九二八）、『春はご婦人から』（一九三二）の二作品も「学生もの」だったようだ。『青春の夢いまいづこ』の作品名から分かるように、小津映画にお

いて学生時代は青春として描かれる。彼らは試験に合格しようとカンニングの作戦を立てたり、意中の女性を奪い合ったりする。平山の学生時代及び海軍時代は、平山の「句」なのである。

ここで、『秋刀魚の味』に登場する音楽「軍艦マーチ」に注目したい。平山は、海軍時代の部下坂本芳太郎（以下、坂本）と再会し、バー「かおる」に赴く。二人は海軍時代を振り返り、「軍艦マーチ」に合わせて敬礼し行進する。

「軍艦マーチ」の名で知られる「行進曲『軍艦』」（以下、「軍艦マーチ」）は、鳥山啓作詞、瀬戸口藤吉作曲のものである（十七）。作曲時期は一八九七～一九〇〇年頃と言われる。元々は、同じ詞に山田源一郎が曲を付けたものが、唱歌「軍艦」として伊沢修二編纂『小学唱歌　第六巻下篇』（一八九三）に掲載されていた。しかし、日清戦争から日露戦争へと向かう時代の中で、山田の牧歌的な曲調は好ましくないと判断され、歌詞は同じままに、瀬戸口が新たに作曲することになる。歌詞は以下の通りである。

一

守るも攻むるも黒鉄の　浮べる城ぞ頼みなる
浮べるその城日の本の　皇国の四方を守るべし
真鉄のその艦日の本に　仇なす国を攻めよかし

二

石炭の煙は大洋の　龍かとばかり靡くなり
弾丸撃つ響は雷の　声かとばかりどよむなり
萬里の波濤を乗り越えて　皇国の光輝かせ

「軍艦マーチ」は、太平洋戦争下、日本軍の戦果を報じるラジオ放送で流されたことから、人々の戦争の記憶と強く結びついた曲となった。日本の軍艦を讃頌するこの曲は、艦長として戦場に赴いた平山にとっては一層、思い入れのある曲だと考えられる。

海軍兵学校の校歌とされるものとしては「江田島健児の歌」が知られている。長田暁二はこの歌について次のように解説している（十八）。

海軍兵学校校歌と銘こそ打っていないが、赤れんがの生徒館出身者にとってみれば「軍艦マーチ」とともに最も印象の深い唄だった。

「軍艦マーチ」は学生たちにとって校歌に相当する

ほどの重要な曲であったことが分かる。平山の海軍時代という「旬」と、学生時代という「旬」、その約二十五年間（十九）と共にあった音楽が「軍艦マーチ」である。

「軍歌」として親しまれた軍艦マーチだったが、戦後はその印象が変化していく。一九五一年の春、有楽町のパチンコ店「メトロ」から、「軍艦マーチ」が大音量で流れ始めたという。「メトロ」の経営者田中友治は、かつて攻撃機に搭乗して戦闘に参加した元海軍だった。進駐軍の兵士と日本の女性が腕を組んで歩く光景への反発から、「軍艦マーチ」を流し始めたとされている。警察官が田中を憲兵の本部に連れて行ったところ、憲兵は「軍艦マーチ」を流すことを快く承諾した。結果、「メトロ」では絶えず「軍艦マーチ」のレコードがかけられることになった。他のパチンコ店もこれに倣い、全国各地のパチンコ店に「軍艦マーチ」は普及していった。また、戦後、進駐軍が「ピース」という題名で「軍艦マーチ」を演奏していたという記録や、銀座のキャバレーで「蛍の光」に代わり演奏されていたという証言もある。また、一九六〇年代は、「軍艦マーチ」に限らず軍歌のリバイバルブームが起こった時期でもあった。

小村公次は、戦後の「軍艦マーチ」の特徴について、次のように述べている（二〇）。

有楽町のパチンコ店「メトロ」で鳴り響いた「軍艦マーチ」も、アメリカの軍楽隊が演奏した「ピース」も、そして銀座のキャバレーで演奏されたのも、歌詞を伴わない器楽曲としての《軍艦マーチ》だったことに注目する必要があるだろう。つまり、歌詞と音楽とを切り離すことによって、軍歌や戦意昂揚のための音楽が別のものとして使われるようになったというのが戦後の大きな特徴だった。（傍線論者）

作品内で「軍艦マーチ」は三回登場する。一度目に流れるとき、平山とその部下坂本は「軍艦マーチ」の音楽に合わせて敬礼し行進する。この場面における「軍艦マーチ」は、歌詞を伴わない「器楽曲」の側面が強い。しかし、二度目に流れるときには、バーの酔客が戦時中のラジオのナレーション（大本営発表）を模倣し、「軍艦マーチ」は戦時のそれとして聞こえてくる。そして三度目、平山が歌詞を伴って「軍艦マーチ」を口ずさむとき、この曲は、かつて戦時に人々が耳にし

た戦意昂揚のための「軍歌」の側面を表す。多くの人々が「軍艦マーチ」の歌詞を忘却し「器楽曲」として親しむ時代においてもなお、平山は「軍歌」としての「軍艦マーチ」を覚えているのである。

平山は、「軍艦マーチ」を歌いながら自身の「旬」を思い起こしていることだろう。ここで、『秋刀魚の味』の最終場面と、一九三一年公開の小津映画『東京の合唱』は、学生時代の同窓会で、同窓生たちがともに寮歌を合唱する場面で終わる。登場人物が校歌を歌い「旬」に思いを馳せる点で『秋刀魚の味』と状況が類似している。以下、『東京の合唱』の最終場面「56　食堂」の脚本である（二十一）。なお、／は改行部分、Tは字幕をさす。

かなり酔っている者もある。まさに宴たけなわである。／引っ張って来られた岡島が、席に着き、ビールを受ける。／入り口から、一人の男入って来る。昔、学生時代、何時も遅れて来て、下駄ばきを注意された男である。／一同、賑やかに彼を迎える。／大村先生、笑顔で、

T　〝君は未だに／遅刻の癖が／矯らんね〟

遅刻男、頭を掻き乍ら、席に着く。／一人、勢いよく立ち上がって、

T　〝寮歌の／合唱だ！〟

と叫ぶ。／「よし、やろう！」と、一同、立ち上がり、歌い出す。／すが子や子どもたちも歌う。

T　〝三年の春は／過ぎやすく
　花くれないの／かんばせも
　今わかれては／いつか見む
　……／……〟

明るく、元気よく、潑溂たる合唱である。／が、岡島だけは、しんみりと、感無量である。／大村先生も感激に浸っている。／岡島、気を取り直し、元気よく歌い出す。／先生も涙を拭き、元気に歌い出す。／一同、手を振り、声高らかに歌う。／――賑やかな光景である。／――完――

主人公の岡島たちは、青春時代の仲間とともに寮歌を歌い、若き日を懐かしむ。しかし、『秋刀魚の味』では、平山が「軍艦マーチ」という校歌を歌うとき、その隣に仲間の姿はない。

艦長として、平山は、多くの戦友の死を経験したことだろう。つまり、「旬」を共にした仲間の中には、

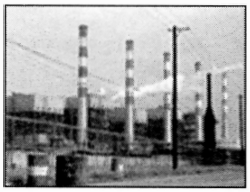
もう会うことのできない故人が含まれている。仲間に囲まれ寮歌を歌う『東京の合唱』と、対照的である。

平山の「旬」は、戦前の小津映画で描かれたような、意中の女性を奪い合うような微笑ましいものではなく、戦場で命を奪い合う凄惨な記憶とともにある。『東京の合唱』公開の一九三一年から『秋刀魚の味』公開の一九六二年までの約三十年の間に、人々は戦争に赴き、敗戦を経験した。一人の男の「旬」を彩る音楽までもが、戦争の陰りを帯びたものとなった。戦争は、小津映画の風景を変化させたのである。

小津は、「笑ったり、悲しんだりをそのまま芝居に出すなら俳優を使わなくとも、動物園のサルで間に合うからね。悲しいときでもうれしいときでも腹におさえている場合がある」と語っている（二十二）。小津映画の登場人物たちが、笑顔の下に感情を隠したように、『秋刀魚の味』における「軍艦マーチ」の明るい音楽の裏には、暗い戦争の記憶が隠れているのである。

四　終わりに

『秋刀魚の味』は、平山の勤務する工場の煙突を映し出すショットから始まる（写真1）。



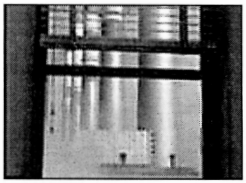


写真1『秋刀魚の味』より

戦後、日本は経済成長を遂げ、「もはや戦後ではない」と言われるほどの豊かな国へと変貌した。煙突とその煙は経済成長の象徴であった。

デヴィット・ボードウェルは、この冒頭のショットについて、「冒頭のショットを支配する銀、白、赤は、路子の花嫁衣装の色調を予告する」と考察している（二十三）。しかし、小津はカラー映画全般を通し、画面に赤を入れることを好んだため、その配色は特筆すべきものではないだろう。ここで注目すべきは、その外観である。白線の縞模様の煙突が並ぶ姿は、平山がかつて搭乗した駆逐艦の外観と類似している（二十四）。

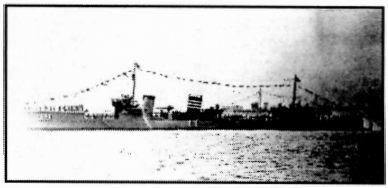


写真2

『写真　日本の軍艦　第10巻』より

駆逐艦は、水雷艇を駆逐するための艦艇である。煙突の白線の数は、その駆逐艦が所属する隊の番号を表す。例えば、第一煙突の二本の白線は、その駆逐隊が戦隊の二番隊であることを示す（二十五）。

冒頭のショットは、作中に「軍艦マーチ」が登場することを予告する。また、これは、平山の「旬」を象徴的に示すショットでもある。

『秋刀魚の味』は、「旬」を迎えた娘の結婚を描く一方で、「旬」を過ぎた人々の姿を描き出した。そしてそこに伴うのは、戦争の記憶である。高度成長の象徴である煙突の外観に、駆逐艦の姿が隠れているように、「もはや戦後ではない」と明るく豪語する時代においてもなお、戦争は人々の心に影を落としているのである。

【注】

（一）一九六二年十一月十八日公開、松竹大船映画

（二）貴田庄『小津安二郎の食卓』、二〇〇〇、芳賀書店、十五～十六頁

（三）『第三回　新・午前十時の映画祭　プログラム』、二〇一五、キネマ旬報社、四六頁

（四）『秋刀魚の味』パンフレット、松竹大谷図書館蔵

（五）初出は雑誌『人間』の第三巻十一月号に掲載され、本文の加除修正の後、単行本『我が一九二二年』に収録された。

（六）『秋刀魚の味』完成台本（一九六二年十一月十五日に行われた完成審査で配布された台本、早稲田演劇博物館蔵）より。本稿で引用した『秋刀魚の味』の脚本は、全てこの完成台本のものである。

（七）貴田庄は、「鱧料理は初夏から盛夏にかけて食べるのが一般的である」ことを理由に、「『秋刀魚の味』の舞台は秋ではない。」と述べている（貴田庄『小津安二郎の食卓』、二〇〇〇、芳賀書店、十六頁）。しかし、物語全体を通して登場人物の服装が夏期ではなく秋期のものであることや、小学校か

ら唱歌「もみじ」が聞こえてくる場面があることから、物語の季節は秋とするのが妥当である。

（八）『秋刀魚の味』完成台本をさす。

（九）作品内で放送されるテレビの野球中継から、『秋刀魚の味』は一九六二年に舞台を設定した作品であると判断した。

（一〇）厚生労働省『人口動態統計100年の歩み』、二〇〇〇、厚生統計協会

（十一）厚生労働省『人口動態100年の動向』、一九九九、厚生統計協会

（十二）『日本国語大辞典　第二版』、二〇〇〇、小学館

（十三）『日本国語大辞典　第二版』、二〇〇〇、小学館

（十四）佐久間は、伴子を嫁にやらなかったことを後悔し、「失敗した」と語る。ここから、「伴子の結婚」は「現状よりも『豊か』な」状況を獲得し得る選択肢であるとした。

（十五）井上和男編『小津安二郎全集［下］』、二〇〇三、新書館

（十六）一九八九、光人社

（十七）以下、『軍艦マーチ』及び軍歌については、小村公次『徹底検証・日本の軍歌――戦争の時代と音楽』（二〇一一、学習の友社）を参考に情報をまとめた。

（十八）長田暁二『戦争が遺した歌　歌が明かす戦争の背景』、二〇一五、全音楽譜出版社、一六四頁

（十九）脚本にて、平山の年齢は五十七歳に設定されている。一九六二年に五十七歳であるならば、一九四五年の終戦時には四十歳である。十六歳で海軍兵学校に入学したと考えると、平山は海軍で二十五年を過ごしたことになる。

（二〇）小村公次『徹底検証・日本の軍歌――戦争の時代と音楽』、二〇一一、学習の友社、二〇六頁

（二十一）井上和男編『小津安二郎全集［上］』、二〇〇三、新書館

（二十二）『秋刀魚の味』パンフレット、松竹大谷図書館蔵

（二十三）デヴィット・ボードウェル著、杉山昭夫訳『小津安二郎　映画の詩学』、二〇〇三、青土社、五九四頁

（二十四）雑誌「丸」編集部編『写真　日本の軍艦　第10巻』一九九〇、光人社、四〇頁

（二十五）雑誌「丸」編集部編『写真　日本の軍艦　第10巻』一九九〇、光人社、四〇頁

（きたざわ　あかり　松本市立清水小学校）